

第17回

二極分化するロマン派音楽 ～西洋音楽の歴史と鑑賞（4）～

学習のねらい

19世紀、ヨーロッパの市民社会と共に発達したのが、いわゆる「ロマン派」の音楽です。今回はまず、「ロマン派」という概念について考察しながら、この時代の音楽を、きわめて小規模なピアノ作品と、重厚長大な管弦楽作品という2つの極端な世界の対比として、とらえます。番組では、表情豊かなロマン派の音楽を聴き、その特徴を実際に体感してもらいます。



講師
沼野雄司

ロマン派と距離感

音楽における「ロマン派」は、19世紀ごろ、ドイツとオーストリアを中心にして展開した音楽の様式です。以前の「古典派」が、均整のとれた合理的な造形を持っていたのに対して、「ロマン派」はむしろ感情や主観を前面に出してゆく点に特徴があります。ただし、「ロマン派」の表現は、単に感情をダイレクトに出すというよりは、ある種の【距離感】を持っているのがおもしろいところです。たとえば恋愛を語る場合にも、遠くにいる恋人への思い、あるいは好きな人との精神的な距離といった題材が好んで描かれるのです。

「ロマン派」の音楽では、こうした微妙な感情のあやを表すために、音楽の形式や和音、そしてリズムといった側面が、「古典派」に比べると、はるかに複雑で微妙なものになっていきました。この繊細さこそが、まずはロマン派音楽の最大の魅力です。

市民社会の発展と音楽の二極分化

ハイドンやモーツァルトが、基本的には「サラリーマン」として、上司である貴族の意向に沿って曲を作らなければいけなかったのとは対照的に、フランス革命以降、19世紀の作曲家たちは、いわば「フリー」の作曲家として活躍しました。そのため、自分の好きな曲を、自分の好きなときに書くことができるようになったわけです。しかしこれは一方で、「売れなければ生活ができない」という厳しい道を選択することでもありました。そのため、彼らは、一般の人たちにも売れるようなピアノの小品の楽譜を出版する一方で、自分の理想を追求する大規模な管弦楽作品を同時に手がけることになったのです。こうして、「ロマン派」においては、小品と大規模作品という2つの極に、音楽が分化していくことになりました。

「超絶技巧」と「標題音楽」

ロマン派の作曲家には、ピアニストとしても活躍した人物が少なくありません。ショパンやリストはその代表格ですが、彼らは自らの演奏技術を誇示するために、華やかな技巧を持った作品を次々に作曲し、喝采を浴びました。

一方で、大管弦楽を好んだ作曲家たちは、しばしばその作品の根底に何らかのストーリー性を織り込みました。これを「標題音楽」と呼びます。つまりは単にソナタ形式とか3部形式といった音楽的な論理だけではなく、ある人物の生涯や、ある恋愛の行方を音で描いていく、というわけです。恋愛に挫折し、夢の中で恋人を殺してしまうという一人の芸術家の姿が描かれている、ベルリオーズの「幻想交響曲」はその代表的な例といえるでしょう。

♪ 今回取り上げる曲 ♪♪♪

- | | |
|------------------------|-----------|
| ● 歌曲集「美しい水車屋の娘」から「涙の雨」 | 作曲：シューベルト |
| ● ノクターン 変ホ長調 作品9-2 | 作曲：ショパン |
| ● 幻想交響曲 | 作曲：ベルリオーズ |
| ● 「24の奇想曲」から第24番 | 作曲：バガニーニ |
| ● ヴァルキューレの騎行 | 作曲：ヴァーグナー |